

テーマ 舞姫はなんのためにかかれたのか

物語を読んでいく中で、森鷗外は何故“豊太郎”という、大半の人が批判するような人物を取り上げたのか、という疑問が生まれ、このテーマを選んだ。

このテーマについて、“豊太郎”という人物とは、“豊太郎”の心境の変化、という視点で迫っていこうと思う。そして「舞姫」は、人は時代の流れに流されずに生きていくことはできない、ということ伝えるために書かれたことを示していく。

まず、この時代は、戸主権がとても強い上、国のために何か功を成すことは、とても名誉なことであった。豊太郎は一人っ子なので、太田家の当主は豊太郎にある。戸主権とは、その家の主だけが持つ権利である。家のことの決定権は当主にあり、家の中でこれほど権力があるので、その家の顔とも言える存在であった。つまり、当主が国のために尽くせば、その家にとっても名誉なことなのである。さらに、この時代に西洋に行くというのは、日本に西洋の法律などを取り入れるためである。ようは、国のためなのである。“

豊太郎”という人物は P264 の 11 行目からあるように、誰から見ても秀才で、P266 の 11 行目「我がふるさと～」より、本人もそれを自覚していることがわかる。そして、自分の名を世に知らしめ、家を繁栄させていこう、という思いを持っていた。以上のことより、この時代の慣習が“豊太郎”という人物を形成するうえで、大きく影響をしているのである。

次に、“豊太郎”の心境変化に注目する。“豊太郎”はまず、自分や家の名を上げるためにドイツに渡った。途中で自分は政治家や法律家には向いていないと悟る。エリスと出会い恋をするが、職を解かれるが、ドイツに残り楽しく過ごす。しかし、相沢、天方の登場によって、帰国して名誉挽回を計るか、生活が苦しくなるがエリスと共に生きていくのか悩み、最終的に前者を取る。P295 の 3 行目「本国をも失ひ～」より、帰る国を失い、名誉挽回もできなくなる。さらに、P295 の 4 行目「身はこの広漠たる～」より、広大なヨーロッパの大都市の人の海に葬られてしまうのかと思う気持ちが、突き刺すように湧き上がってきた。つまり、秀才であった自分がもう一般の人と変わらなくなることがたまらなく嫌だ、と思ったために前者をとった。今の方は、こんなにも名誉のために必死になるだろうか。前の段落で述べたこの時代の慣習の影響によって、名誉挽回をしなければならない、という気持ちがでたのである。

今までのことから、私は“豊太郎”は日本の慣習というこの時代の流れによって本文のような結果に至ったと考える。ドイツの大学の自由に触れて、日本の慣習に触れてなかった時もあったが、最終的には日本のこの時代の慣習に縛られている。時代の流れからは逃れられないのである。

また、P290の4行目「この間～」より、エリスの手紙が来ていなかったら、豊太郎は忙しさのあまり、エリスのことを考えない日があった。ということは、豊太郎はエリスのことをそんなに愛していなかったのでは、という疑問が生まれる。日本に帰ると決断したのは、このことが原因なのではないかと考えられる。

しかし、P298の16行目「エリスが生ける屍を～」より、豊太郎がエリスのことを愛していたことが分かる。それに、天方に返事をする時、エリスについては一切書かれていなかったもので、そのときはエリスのことはあまり重要ではなかった。やはり、この時代の流れが影響していると考えられる。

現代でも、将来就きたい職業は決まっていないが、ほとんどの人が進学をしているから、自分もそうする。という、今の時代の流れに流されていることはたくさんある。時代の流れに流されることは悪いことかは分からないが、物事を自分でしっかり考え、後で後悔のないようにしたい。

参考 岩本幸一の訳